

福沢諭吉 『民情一新』

pusapusa

民情一新緒言

世論はどこでもいっています。

西洋諸国は文明開化の国だ、と。

この言葉は、まったくもってそのとおりだとおもいます。私もまた、西洋諸国というのはすごい世界だ、と説く人間のひとりです。

ですがアメリカ生まれの道具をみれば、フランス生まれの学問をみれば、ばくぜんと文明開化と指さすひとがいます。

どのあたりが文明開化なのかと理解できなければ、それをまなぶにあたって、それを採用するにあたって、おおきなまちがいはないだろう、などと期待してはいけません。

そもそも西洋の文明開化がおこった理由には、土地がひろいだとか、せまいだとか、人口がおおいだとか、すくないだとか、そういったものは関係ありません。道德心のさかんか、そうでないか、勉強のすすんでいるか、おくらしているか、哲学の域が深いか、浅いかでもありません。

ためしにアジアとヨーロッパとをくらべて、おたがいの国で生まれた道德をみてみましょう。

どのていどの差があるでしょう。

キリスト教も、儒教も、仏教も、どの経典もまちがったことはいっていません。

それならばキリスト教の人間が「自分たちのおこないこそただしいのだ」といえば、仏教もまたただしいことになります。キリスト教がわるいのだといえば、儒教もわるいことになります。おたがいの宗教が、自分たちこそただしいとなえれば、その場の論争におわるぐらいのものでしょう。

宗教は文明開化がおきる、おきないにかかわることがらではありません。

また、西洋の学問と東洋の学問とを比較するとどうでしょう。

やっていることこそちがいますが、その深さをかんたんにきめてはいけません。東のものしりのなかには、西の学問をしらないくせに「あちらはへたな学問だ」と吐き捨てているものがあるようです。西のものしりにもまた、東の学問をまなばないままに「東のやつらは無学者だ」とあざけっているようですが、どちらのいっていることも議論ではありません。

学問ができる、できないというのは、個人個人の学力にかかわっているもので、東西の学問の深さとはかかわりありません。学問のすすんでいる、すすんでいない、というのは、文明開化の源だということはできません。

理論の深浅もまた、いうまでもないでしょう。西洋の理論は、かならずしも深いわけではありません。東洋の理論は、けっして浅いわけではありません。この理論が深いといえるのは、東でも、西でもなく、かえって太古のインドにあるといえます。

西洋諸国に文明開化がおこったのは、道徳の心からでも、学問の高まりからでも、理論からでもありません。それならば、文明開化はどこからおこったのでしょうか。

私からみるならば、これは人民どうしの接触がおおくなったからおこった、といわざるを得ません。

天地に生きる、世界じゅうの人間がたがいにふれあう場所のことを社会といいます。

社会には国のような大もあれば村のような小もあり、活発であるかといひともいれば、無力なひともいます。

これらはみな、接触のおおい、すくないできめられたものです。接触がおおくなれば、村も国になります。接触がおおくなれば、無気力の人間もあかるくなるのです。

接触する機会をよくつかいこなして、摩擦や刺激をうけて活発な心を手にいれれば、もうしずかな生活に逃げこもうとしてはいけません。

たとえば、山にこもってひとりで住む隠者は、その心はおのずとむなしいかんがえかたをするものです。ですがこの隠者を、街なかに移り住ませてみたとすれば、その隠者の心は絶望的なかんがえかたをしたくても、けっしてできなくなるでしょう。耳も口も、おのずと世間にくわしいようになるのです。

風流にいえば、一隠者を街びとに化してしまう、というものです。文明的にいえば、そのひと

を活発にして、心身がじっさいに役だつようになった、となります。

人間社会もおなじようなものです。

接触がたくさんできて、ひとの往来がおおくなれば、ひとの心身をじっさいの用にもちいなければならないくなります。農作業しかない村のまんなかに、おおきな道ができて、ひとがよく通るようになれば、その旅人の靴を修理してやるものがいります。服をあつらえるところもできます。そうして村は国になるのです。

ひとの心が、ひとたびじっさいに役だとうとおもうようになれば、社会でおこなわれる学問も理論もみな、じっさいに役だつものでなくてはなりません。

ゆえに東西の学問や理論をくらべても、その進歩の度合いにいっさいの差はないといえます。

それなのに東洋のやっていることが生活に役だたず、西洋のすることが役にたちやすい、というちがいは、どうしておきるのでしょうか。その原因は、ひとびとの接触の機会のおおいか、すくないかにあるといわざるを得ません。

東洋の詩人などは西洋を評して、その学問と理論は西洋土着のもので、西洋の土地古来のもののかんがえかたから生まれたものだ、といっているそうです。

が、その土着のかんがえかたとやはら、いまの文明世界のかんがえかたとなっているのだから、これこそ人間の動力とみとめざるを得ません。社会での人間のふれあいがだいじなことは、この理由からでもわかることでしょう。

むかし西洋諸国では航海術を研究することで、ひとびとが北海、地中海を往復するようになりました。

それだけではありません。

いまとなつては西洋人は大西洋を越えて、太平洋もまたぎ、地球上のあますところなく、歩ききっていないところはありません。

西洋の道具を他国にもちこんだり、西洋のひとも他国にうつったり、文化のまったくちがう国にはいたり、言葉のちがうひととあうときには、口ではたとえられないような苦勞もあつたことでしょう。自慢したくなるような愉快なこともあつたことでしょう。

彼らは心身をひたすらきたえて、見聞をひろめることで、活発な性格を生みだしました。その利益は、東洋人がこれまでにしらないものでした。

それならばいま、西洋諸国があれほどに高い文明をもっているのは、ただ人間どうしの接触のおおさにならざる原因があるといえます。

すなわち、東洋諸国がいまだに文明が低いままなのは、他国どうし、しらないものどうしの接触がすくなかったからといっていいでしょう。

1800年代になって、蒸気船、蒸気機関車、電信、郵便、印刷の発明品をつくりだして、この人間の接触の方法を、よりたくさんにしたことは、まるで人間世界を転覆(てんぷく)させるようなおこないだといえます。

本編はおもに、この発明が、民情、つまりひとびとの心にどのような影響をおよぼしたのかを論じるためにつくられました。蒸気船車、電信、郵便、印刷とよつつの項にわけてみましたが、よくよくみれば印刷も蒸気機関をつかっています。郵便配達も蒸気船や蒸気機関車をもちいています。電信も蒸気のを借りているのです。

それならばつまり、すべては蒸気のかひとつのおかげといえます。人間社会がうまくめぐるのは、蒸気のおかげともいいかえられます。

1800年は蒸気の時代です。この時代の文明は蒸気の文明といってもいいすぎではありません。

蒸気がひとたびあらわれたときから、むかしのものをいっせいに転覆していったのです。この蒸気のかで、布を織るのは人間の手ではなく機械になりました。ひとをはこぶのもひとではなく、機械になりました。人間の力がそれほど役にたつものではなくなっていきました。

いろいろと賛否両論があるようですが、蒸気のかが生みだしたものを評価するときは、むかしのかんがえかただけで判断してはなりません。

蒸気は1800年以前にはなかったものです。

まさにこの1800年代というものは、世界が一新された年代だといえるのです。となれば、いまの蒸気のかは、いま生まれたばかりのかなから、むかしのかんがえかたで判断することはできないのです。

むかし、西洋人が遅い遅い帆船をあやつって、わずか数百キロメートルの各地を行き来するだけで、彼らは活発な性格に、そして強い精神を身につけていきました。

帆船でさえこれだけの効果があったのです。蒸気船や蒸気機関車をつかって、帆船などとはくらべものにならないほどすばやく地球の水陸をかけまわったら、どうなるでしょうか。

たどりついた国に、電信、郵便、印刷をつかって、いろんな情報を伝達させることができれば、その国の勢力は、はかりしれないものになるでしょう。

一新また一新、一変また一変。これまで地球上にあった古いものを、片っぱしからしのいでいくまでは、この一新も一変もおわらないことでしょう。

ただそのさいに、ひとびとのなかに、すこしなりとも旧習をのこしてやろうとするおこないもあることでしょう。が、けっきょくはこの変革をおくらせるぐらいで、とめることはできません。

この世界のうごきをしらずして、どこかの腐儒者が、ひたすら旧時代のふるいかんがえかたを守って、世のつよい勢いにあらがおうとしています。どこかの軽薄な子どもが、古風を真似して満足し、さいごにはけっきょく社会からとりのこされています。不可解なことです。

彼らのやっていることはわからないでもありませんが、世の勢いはもはや、地球をのせた船のようなものとなっています。

われわれ世界人民はみな、その船の上にいるのです。人間の心が波のようになってほかの人間におそいます。人間の情が海のようになってひとの体をつつみます。

そんななかにあって、ひとりだけこれに抵抗して気づかないふりをする、というのは、船にのりながら船のうごかないことをのぞむようなものです。彼らのかんがえの浅いこと、彼らの心のいやしいこと、言葉ではいいあらわせません。

この腐儒者たち、軽薄少年たちが文句をいっていたところで、彼らもまたいずれ船にのせられて心のひらくときがくるのみです。

蒸気、電信の勢いは、これほどのものです。

これはべつに西洋人だけが私有しているものではありません。たしかにこの発明はもともと西洋でされたものですが、じっさいに蒸気機関車や船や印刷機をつくりだしてみれば、そのすさま

じいほどの成果に、つくりだした西洋人自身もおどろき、うろたえているありさまとなっています。

西洋人がこのような奇跡をおこしたことは、ハトがタカを産んだようなものです。蒸気機械というヒナにも羽がはえれば、やがて飛空するようになります。そうなればほかの鳥をおびやかすようになり、ときとしては生みの親をこわがらせることもあるのです。西洋人という母が蒸気というタカにいただくおどろき、狼狽(ろうばい)も、こうかんがえてみれば理由が見つくわけです。

そうしてこのタカが生まれたのは、たかだか50年前です。その勢力があらわれはじめた年月になれば、たかだか2,30年にしかありません。

いまこの世で発明されたものは、すべて世界じゅうの財産です。それならば、各国の人がこの西洋人の発明をつかってもいいのです。

その気のあるひとがこれをつかえば、かならずひとを制し、おもうようにつかえるでしょう。その気のないひとは、かならずひとに制されるでしょう。

私はかねてからいいたいことがありました。

鉄こそが、文明開化の源だと。

これこそが本書でいちばんつたえたいことです。

これからわが日本も、鉄を掘り、鉄をアメのようになるまで熱して、これを自由自在の形につくりかえるようにするのです。鉄道をつくるのです。電線もここからあみだすのです。機械もくみたてるのです。船をつくり、武器をつくり、道具をつくりあげて、人間が生活をたもつのに必要なものを、すべて鉄でこしらえるのです。

そうしてはじめて日本も文明開化をしたといえます。

ただ、人民があたらしいものごとにふれてやろうという気をおこしたあとに鉄を打つか、それとも鉄を打ったあとに人民があたらしいことに興味をもつようにするべきか、このあたりはまだまだ世間では議論もあることです。私もこれをかんがえていないわけではありませんが、本編の目的でもないので、この話はべつの機会に設けるとしましょう。

さきほどもいいましたが、西洋人は蒸気、電信の発明をしたとき、それをみて狼狽しました。

その狼狽がおこったのは、どうしてでしょう。

蒸気、電信の発達とともに、ひとびとの意識がかわったのです。

老人は少年がすさまじい勢いで成長していくのにおどろくようになりました。電信や印刷の力によってすばやく情報がつたわることで、少年の成長速度がかわったのです。

富んだものは、まずしいもののおもいあがった行為にいきどおるようになりました。これもまた電信によるおかげで、貧しいものがどこでなにをしているのか、わかるようになったからです。逆に、貧しいもののなかにも、思想の気高いものがあることをしって感服することもあります。

政府もまたそうで、蒸気機関車のはこぶ新聞紙や郵便の力によって、人民の苦情がふえたことに心を痛めるようになります。もちろん逆に、人民が国を守るだけの力をもつことをながめるこ

とができて、よろこぶこともあるでしょう。

よろこんだとおもえば心配し、いきどおったとおもえば感服するようになるのです。そのめまぐるしさ、蒸気のない時代にはかんがえられなかったことです。

だからこそ、私はこれを狼狽といったのです。

いまイギリスの文化は、もっとも一新した民情に適応した文化だといえます。が、そういいながらも、あの国ではいまもまだひとの心の変化がとまっていないようです。

労働者たちが「ストライキ」といって、自分の会社にたいして、給料をあげろ、と責めたて、おどすことで地位を確保しよう、というやりかたが有名になっているようで、さいきんはますますこういう風潮になってきた、といいます。貧しい者がみるみるかわっていくのをみてとれるのです。

また、おなじイギリスの国で、ギボン・ウェイクフィールドというひとが出版した「植民論」に書いていることがあります。以下抜粋します。

世間では「人民が勉強する環境がととのったことは、たいへんな成果だ」といっています。それこそがさいきんの流行で、社会すべての善は教育のよさから生まれる、といわないものはないほどです。

私もまったくもって同説です。こうなるのが理想というものです。

が、そう理想を口にしながらも、じっさいに善が生まれたのをいまだにみません。下民を教育したところで、幸福など増してはいないのです。それどころか、知らないものをしり、みえなかったものをみるようになり、心に不平をもつようにさえなっています。

ですがこれを、わが国ですっとおこなわれてきた教育の成果としてみるものもいます。

そのひとびとによってとなえられているのが「チャーチスト運動」と「ソーシャリズム運動」です。チャーチスト運動というのは1830年ごろからこのイギリスではじまったもので、労働者たちが自分たちも政治家になれるようにしろ、ととなえる運動です。ソーシャリズムは社会運動と訳すことができるもので、社会で生まれた生産物などを、その国に住むひとすべてに、平等にわけあたえよう、というかんがえかたです。すべての仕事を国が管理することで、貧民がでな

いようにするのが目的だといいます。（この主義はフランスやほかの国々にある社会党とそれほど変わりません。いずれも下民の権利を守るために、貧富を平均してやろうというものです。そのために議員選挙法を貧富平均しやすいようにかえてやろうというのが、社会党のだいたいの意見です。が、私にいわせれば、貧賤に味方して富貴を犯すものとしかいいようがありません。）

警察のものたちは、こういった社会党などは力でねじ伏せればたやすいことだ、と軽んじます。またあるひとがいうには、社会党などはほかの党とちがって、少数派意見をかかえたひとびとのあつまりなので、心配することはない、政治をうごかすことはない、というものもいます。

が、私が社会党をみる場合は、すこしちがいます。

労働者のチャーチスト運動も社会主義も、けっきょくは人民の不平心のあらわれだとおもうのです。

その人民のなかでも、とくに日雇いなどで他人につかわれる最下層のものが、このふたつのかんがえかたに共感しやすいものです。日ごろから目上のものを恨み、憎み、人並みの生活をしたいたいとおもっているものたちなので、とうぜんでしょう。

彼らはけっきょく、土民の域からでることのできない連中です。

この状況からかんがえれば、教育がひとびとのあいだにされるようになるたびに、それといっしょになって貧乏人の権利保護というかんがえかたもひろがることでしょう。

教育が一步すすめば不平もまた増すのです。ついには富というものが、だれがどんなにがんばっても手にはいらないものとなり、氣力をしぼって文明を高めてやろうという人間がいなくなるかもしれません。これは国をおびやかすことだといえます。なによりも危険というものです。

この引用文は、ほんとうは移民の方法をどうこういうための論文です。あふれる人口を早くよそにうつすべきだ、というのが本論ですから、この「民情一新」とはすこし目的のちがう話です。

が、ここからイギリス人の心にくみとってください。

いまのヨーロッパ諸国は、人知が進歩したために社会がみだれ、政府も民間もいまだにそのゆくべき道を見つけれずにいるのはあきらかです。

これからのなりゆきをかんがえれば、蒸気の恩恵によって物価も上下するでしょう。蒸気ので賃金も増えたりへったりするでしょう。蒸気の誕生のためにお金を借りたときの利息もすこしずつあらたまりもするでしょう。学問も技術も、商売も工業も、ひとのすることすべてに蒸気がかかわるのです。

とうぜん、蒸気は政府の政策にも影響をおよぼして、どんどんかわっていくことはうたがう必要はないでしょう。フランス民法も不都合なところをみつけることでしょう。ロシア、ドイツの警察法も無力をしるでしょう。

いわゆる驚愕と狼狽の西世界というものです。

それなのにここで気に食わないのが、わが日本の学者たちが、その驚愕狼狽の西洋を盲信していることです。

明治はじまってから十年以上になりますが、世論のいっていることをながめていると、ひたすら西洋のつくりものをほめたたえ、足もとのおぼつかない西洋に寄りそい、はなはだしいことには西洋をおそれうやまい、おがみたおし、わずかにもうたがいをいれないことです。

一も西洋、二も西洋。なんの意見もはさまずに西洋の方法を猿真似しているのです。ちいさなところでは日常生活の衣食住のすべてを西洋にしています。おおきなところになれば政令法律です。

自分の国でよく方向のつかないものごとすべては、とりあえず西洋の真似をしてすませているのです。おかしなこと、はなはだしいというものです。

いまの西洋諸国はまさに、狼狽して方向にまよっているものです。道にまよって左か右かわからないものをつかまえて、みずからのゆくさきをきめるといのは、狼狽のもっともはなはだしい人間ではないでしょうか。

どこかの家に火がついたとしましょう。その家の妻がうろたえてなにをしていいかわからず、金の箱がたいせつなものだったことをわすれて、ただ一個の行灯をかかえて逃げだすようなものです。

ほかにもこんなのはどうでしょう。

どこかの家の主人が病気にかかったとしましょう。家のものは医者をまねくのわすれて、ま

ず親戚に報告をするのです。

どちらも狼狽というもので、これを西洋のありさまとおなじだ、というのです。このような火事や急病のあわてふためきを、真似するにはなりません。

わが日本でも、西洋の文明を話しあうときには、あわてた妻や家人がでないようにしなければなりません。でなくては、いたずらに世界の識者のあざけりを買うことになります。

私は西洋の文明をとりこむべきではない、といているわけではありません。西洋文明こそがいまの世界文明になっている、その意味をつたえたいのです。

さいきんの文明は蒸気の発明によって生まれました。この発明がおこったために世界各国の民情はことごとくかわっていき、あたかも人民がまとめてとりかわったかのようにになりました。

この文明進化の速度についていくことができる人物のみが、文明を語る事ができるのです。西洋を盲信しては、けっして文明を語っていることにはなりません。本編をつくりあげた目的は、ただこれを忠告するためにあります。

また、おわりにひとことをつけくわえます。

前にも書きましたがこの本は蒸気船車、電信、印刷、郵便のよつつこそが文明の源だといいました。「文明がおこった理由はこれら以外にもたくさんあるので、よつつだけともかぎらない」という反論もあるでしょう。

もしそういう説があるのならば、こうかんがえてみてください。

いまの西洋をしたうべきか、恐怖すべきか、まずはどちらにするかをきめてください。

つぎには、何かふしぎな力でも働いて、世界じゅうにこの蒸気船車、電信、印刷、郵便というものがなくなったとしましょう。あるいは人類がみな、このよつつを忘れてしまう、とかんがえてみましょう。世界じゅうから蒸気文明をとっばらってみましょう。

するとどうでしょう。そのあとでも西洋諸国をしたえるでしょうか。恐怖すべきものがあるでしょうか。西洋のやつらはそれほどでもないやつらだ、とみるでしょう。

たとえほかに目を見張るようなものが西洋にあったとしても、それは西洋にも東洋にもあるものです。それぞれの個性をもったもので、優劣を判断できるようなものでもありません。

それならばすなわち、いまの世界文明の源とは蒸気のよつつの力といっても差し支えはないでしょう。このあたりは、もうすこし意味をほりさげて本編にもしるしています。読者へのわかりやすさをだいじにしたかったので、重複をいとわず、かんたんにここに数行の文字を、この前書きのさいごにつけたしました。明治十二年七月七日、著者しるす。